

空手道詳説（2）

第1章 空手道の歴史

1 格闘技の始まり

(1) 生きる知恵と格闘技

生きとし生けるものの全ては、生存と種の繁栄のため手段を持ち、それを効果的に行使しながら何万世代か分からない悠久の営みを続けてきた。そして未来へと続く。

大方が移動を伴わない植物にあっては、自己を守るため刺を有したり、あるいは毒液を出して身を守るものもあれば、花なら他の生き物を誘き寄せ蜜や匂いで交配の機会を広げ、種子なら風にまかせに遠くまで飛んだり、動く物体に巧みに付着して移動し、種の繁栄を勝ち取っている。

動物ともなれば、走力や飛翔能力に優れていたり、毒針を備えていたり、鋭い爪や牙を武器とするばかりか、中には堅い鎧をまとったように覆われた身体を持つもの、全身を刺で守る進化、他の動物が棲めない過酷な環境に適応して生き延びる種属すら存在する。

これらの多様性は、進化という名の元に淘汰や適応によって変容を遂げ、どの種にあっても全て生きるために闘い、防衛することが繁栄をもたらす。

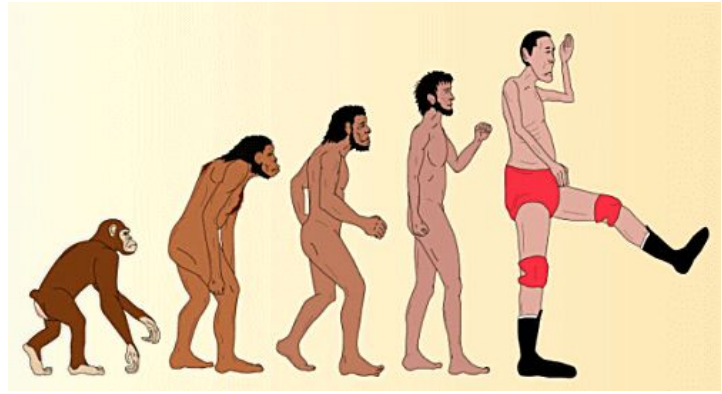
それでもなお生きるための闘いは、悲しいかな食物連鎖という自然界の法則に支配されている。



我々人間の遠い先祖にしても、樹上生活から草原へと生活の場を移さざるを得なかった時、それまで以上に危険が増したはずである。何時の頃からか頭髪などの一部を除き体毛を失って肌をさらし、爪や歯は他の肉食動物と闘う機能はほとんど薄く、樹

上生活に適応してきた筋骨はか細く、特段に跳躍力や走力に優れていないばかりか、草原の中の直立歩行は目立ち過ぎる。

それは、他の動物と比較すれば意外なほど無防備に近い身体機能から、弱者の立場で生き延びてきたと伺い知ることができる。



人間が野生であった時代、元々が草食を主とする雑食性から出発したひ弱な身体構造は、陸上なら肉食獣のライオン虎、豹、熊など、水中なら大型の鱈が相手では太刀打ちできない。草食獣でも大型の象、犀、河馬、野牛には近寄らない方が得策であったろう。

しかし、人間には他の動物に勝る知能が備わっていた。

例えば、地上最大の哺乳類であったマンモスは、約1万年前頃に突如姿を消してしまうが、絶滅した原因の一つに人間による乱獲が挙げられている。巨大なマンモスに人間が群がり、崖に追い込んだり、投げ槍を打ち込んで弱らせたりして殺戮する様子は、想像するだけで総毛立つ思いがする。マンモスは、環境の変化などもあって現世まで生を保つことができなかつたかもしれないが、人間が絶滅時期を速めたことだけは確かであろう。

それらの時代が経過し、狩猟採集や農耕が文化として定着し生活が安定することで、今度は集団同士が勢力圏拡大をめぐる争いを繰り返すようになる。直立し両手を自由に使える人間は、早い時期から道具を操作し物を投げつける行為に至るのは、武器発明への萌芽となる。

発達した武器や機動性の追求による戦法は、武器を操り相手より勝る戦術をもって勝利を最優先の目的として戦う。そこでは、個々人の戦闘能力が雌雄を決する重大要因となる場合が多い。したがって、勝つための手段を求める戦術の中には、個人の戦闘能力を高める必要性は格闘技につながった可能性が濃厚である。

また、敵対者から狙われた場合、いかに万全を期した防御態勢を取ったとしても、絶対安全はあり得なかつたであろうし、虚を突かれることだって想定しなければならぬため、個人として防衛戦闘の能力を高め精神力を向上させる方法として、格闘技は有効手段といえる。

見方を変えるなら、格闘技術の獲得向上は、自己防衛のみならず子孫（家族）を守る重要性も無視できないとすれば、これは生物共通の本能が出発点となる。

(2) 東欧の格闘技

人間の自衛本能から発して、個々人の強弱や技法の巧拙は格闘技を発達させ、個人や集団の利害関係にも一つの役割を果たし、研究され発展してきたと考えられる。

世界で最も古い記録として確認できるのは、最初に文字を使った古代メソポタミア文明のシュメール人が残したもので、BC3300年頃といわれている。この地は世界の四

大文明発祥地の一つである。文字として残された記録と、あたかも相撲を取っているような像（レスリング）や、拳闘（ボクシング）のような石板の発掘もある。

次の写真はその一例で、共に BC3500 年前と推定されているから、今から 5500 年前の遺物で、この時代既に格闘技が盛んに行われ、組織的活動があった可能性を示す。



相撲像銅製壺、カファジェ・イントウ
出土 (BC3500 年)



拳闘士像石板、ディヤラ溪谷出土
(BC3500 年)

註：この 2 枚の写真は、藤原稜三著「格闘技の歴史」（ベースボールマガジン社、平成 2 年 3 月初版）から転用した。

格闘技という限り、単に獲物を狙うがごとく猛威を振り、強ければよいというものではない。少なくとも攻撃技と防御技により攻防一体となる技法をもっていて、競い合う形態でなければならない。

それに伴って、人体の急所を知り、鍛錬過程における身体の損傷や、対戦に際しての怪我等の対処や救急法にも通じていることが不可欠となる。

他に著名なのは、古代エジプトにおける格闘技でなかろうか。右図はベニ・ハッサン遺跡の王の墳墓壁画



にあるレスリング像で、他にも拳闘の図柄もあって、それらはBC2100年頃のものである。



古代のギリシャにおいては、シュメール人より1000年程遅れるが、ギリシャ共和国に属するクレタ人（ギリシャ南方の島人）がボクシング、レスリングに類して描かれた遺物は多数出土しているが、もう一つ特筆されるのは古代パンクラチオンで、打撃技と組技を組み合わせた格闘技である。

選手は全裸で戦い、勝敗は相手がギブアップすることで決した。左図はイタリアのウフィツィ美術館所蔵のパンクラチオン闘

技像であるが、この競技の禁止事項は、①目や鼻を指で突いたり引っ搔く ②陰部への攻撃 ③噛みつき。この他はなんでもありで、身長体重も制限はなく、記録によれば身長が2m20cm、体重が200kg超の有名選手もいたという。極めて野蛮で残酷な様相を含む格闘競技といえよう。しばしば敗者は死を意味したと伝えられる。

このパンクラチオンは、古代オリンピック第32回大会（BC648年。第1回オリンピックアードはBC776年、以後4年に1回開催）に初めて種目として登場する。

激しい格闘技の例としてパンクラチオンを取り上げたが、東欧全体としては、拳闘（ボクシング）、相撲（レスリング）の原型となる格闘技が始まり広まっており、競技性も研究されて様々な国（地域）で行われていた。但し、これらの格闘競技の勝者は称えられてしかるべきとしても、キリスト教の博愛精神や騎士道精神、スポーツマンシップの生まれる遙か以前のこの時代、精神性や倫理観の涵養、人命尊重などはどのように扱われてきたのか、その真実を知ること非常に難しい。

(3) 中国の場合

空手は、中国拳法の影響下の元に琉球国（現在の沖縄県）で発生したため、中国における格闘技の歴史は無視できない。

中国において原始的な農耕が開始されるのはBC3000年以降で、日本なら縄文時代の中期となる。

BC2000～BC1600頃には中国最古といわれる夏王朝があって、その後、夏王朝を滅ぼし黄河下流に次の王朝を誕生させるのは、C1550年の殷（BC1550～1066年）である。夏王朝以前は先史時代といわれている。

殷代になって初めて青銅器が作られ、漢字の基をなす亀甲獣骨文字が使われ始めるが、文字は前述の古代メソポタミア文明のシュメール人より1700年余り遅かったことになる。

中国で拳法（西欧ならボクシング）、相撲（同じくレスリング）の類は先史時代から存在したと考えていいが、先史時代の伝説に全く登場はなく、現れるのは治世にまつわるものや戦史物語だけである。但し、拳法の類を手搏（しゅはく）、相撲を角抵

(かくてい。又は角觥)と呼び習わしているので、素手素足を鍛錬して有効に用い、闘う手法(技術)として存在していたことは確かである。

先ず手搏だが、「手」は五本指のある手首を描いた象形文字と容易に分かるが、「手に取る」の他に「着手」「手元」、「上手」「下手」「名手」「手紙」「奥の手」「捌め手」「手を切る」「あの手この手」「手段」など、実際の手(hand)以外に芸や仕事の巧拙、方法にまで及ぶ多くの使い方がある。この「手」について、琉球国に中国拳法移入以前から、「手」(ティー)と呼ばれる格闘技術が存在していたと伝わるから、後ほど詳しく触れることにしたい。

「搏」は、「ぱんと手のひらで叩く」「平面を打ち合す」「手のひらを物に当てて掴む」の意である。

次いで角抵であるが、「角」は中空の角(つの)」で、「2線が一点に出会う」、「すみ」「かど」となる他に、「くらべる」「角突き合わせる」「競り合う」「力くらべをする」の意味がある。「抵」は「そこまでびたりと届く」「びたりと当たる」意味もあるが、この場合は「ぬきさしならぬよう押しつける」で、「觥」も同じく「抵抗のあるものにぶつかる」「角を突き合わせる」の意味である。

中国の正史に全く現れなかった徒手格闘技は、時代が下がって南北朝時代のAC527年頃、南インドのパラヴァ朝の国王第三王子として生まれた達磨(ボーディダルマ、中国禅宗の開祖)が中国に渡り、河南省の嵩山少林寺(496年開基)入って禅と拳法を伝え、そこから「少林寺派」といわれる南北の諸拳法が広まったとされている。達磨は、釈迦から数えて28代目の法統を継ぐ仏弟子である。

勿論、正史以外に手搏や角抵は登場するが、夏王朝から数えても4000年余り、広大な国土と様々な人種を交えた中国において、数多の王朝の入れ替わりと興亡が繰り返されてきた歴史経過から見て、支配権を巡る苛烈な闘争は、戦団の武器の強弱と機動性の優劣は最も勝敗を決する基因であったこと疑う余地はないとしても、死命を懸けた戦いを左右するのは、集団練兵や武器術のみならず個人技の果たす役割は大きく、個人格闘技による鍛錬も重視されていたこと相違ない。

私見として、幾多の王朝の興亡と交替が続いた中国という大国で、達磨によって初めて拳法がインドから伝わったとする説は、荒唐無稽と言わざるを得ない。

『達磨によって初めて拳法が伝えられた』ではなく、『達磨が少林寺で伝えたインド



剣豪・宮本武蔵画「達磨図」

の拳法は、それまで長年伝承されてきた手搏と比較して、体系化に優れていた部分もあったため、手搏にも影響を与えて興隆した』とする方が妥当でないかと思う。

もう一つ疑問視するのは、当時は世界文明の先端を走っていたと自負する中国人が、何故達磨の拳法をもって、中国拳法の発祥とまで後世に伝えたのだろうか。

(つづく)